翻　訳

エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール著「玄奘の旅程に関する覚え書き」

宮　本　亮　一※

※　奈良大学

訳者前書き

本　稿　は、Étienne de la Vaissière, “Note sur la chronologie du voyage de Xuanzang”, *Journal Asiatique* 298/1, 2010, pp. 157-168の全訳である。

中国仏教史上には数多の僧侶が存在するが、玄奘ほど有名な人物はいないのではないだろうか。しかし、彼がいつ西方への旅に出発したのかという問題は、長年、627年（貞観元年）出発説と629年（貞観三年）出発説の2つが併存し、明快な解答が得られないでいた。本稿で言及されているように、日本では1981年に発表された桑山正進の説（627年説）が有名であったが、これを採らない研究者もいた（長沢和俊（訳）『玄奘三蔵』講談社学術文庫、1998年など）。

そのような中、本稿は629年説を確定づけることに成功したもので、中央アジア史研究上、非常に重要な論考といえる。2010年以降、日本で発表された論考でも、本稿の説が受け入れられてきた（例えば、Yutaka Yoshida, “When did Sogdians begin to write vertically?”『東京大学言語学論集』33、2013年、pp. 375-394；齊藤茂雄「砕葉とアクベシム：7世紀から8世紀前半における天山西部の歴史展開（改訂版）」『帝京大学文化財研究所研究報告』20、2021年、pp. 69-83など）。

しかし、近年日本で発表された、玄奘に関する問題を正面から扱った以下の2つの論考では、残念ながら、ドゥ・ラ・ヴェシエールの議論が参照されていない：吉村誠「玄奘の年次問題について」『駒澤大学仏教学部論集』46、2015年、pp. 183-205; 桑山正進「『西域記』『慈恩伝』読後」佐久間秀範・近本謙介・本井牧子（編）『玄奘三蔵：新たなる玄奘像をもとめて』、勉誠出版、2021年、pp. 3-30（桑山正進『玄奘三蔵の形而下』、ヒンドゥークシュ南北歴史考古学叢攷III、2023年、pp. 181-200に再録）。そこで、仏教を専門とする研究者をはじめ、広く日本の学会に本稿を紹介することを目的に、ここにその和訳を提出することとした。玄奘は、帝京大学文化財研究所が発掘調査を続けるアクベシム遺跡を訪れており、発掘成果をもとに当地の歴史を考える際、玄奘の出発年は重要な基準の1つとなるはずである。このことも、本稿をここに掲載する理由である。

なお、本稿では日本の興聖寺本『続高僧伝』が重要な論拠となっており、著者はこの写本の祖本を「初稿（une première rédaction）」や「初版（la première version）」と呼んでいる。しかし現在では、興聖寺本よりも金剛寺本『続高僧伝』の方がより古い祖本に遡ると考えられている。金剛寺本や興聖寺本など、日本に所蔵されている『続高僧伝』の写本や、その玄奘伝の特徴については、国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所・文科省戦略プロジェクト実行委員会（編）『續高僧傳巻四・巻六』、日本古写経善本叢刊・第八輯、2014年、およびそこに収録されている斉藤達也の論考（「金剛寺本『続高僧伝』の考察：巻四玄奘伝を中心に」）に詳しく解説されているので、それらを参照されたい。結果的に、金剛寺本などの記載は本稿の結論を裏付けるものとなっており、斉藤は、玄奘の出発年について、「（貞観）三年出発が当時の常識であったのであろう」（p. 256）と述べている。なお、興聖寺本のテキストについて、本稿では藤善真澄のものが参照されているが、現在は吉村誠「興聖寺本『続高僧伝』巻四玄奘伝：翻刻と校訂」『駒澤大学仏教学部論集』44、2013年、pp. 167-216も利用できる。

著者のエチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエールは現在、社会科学高等研究院（École des hautes études en

sciences sociales）の教授である。2002年に初版が出版され，現在第三版まで刊行されている*Histoire des marchands Sogdiens*（ソグド商人の歴史）によって学会に知られることになったが、その後はソグド人の研究だけにとどまらず、アッバース朝革命や中央アジアの人口学など、時代的にも地域的にも幅広い研究に取り組んでおり、今や世界の中央アジア史研究を牽引する人物として認識されている。以下に挙げる編著書に加え、まもなく、中央アジアの歴史に関する700ページを超える大著を出版する予定と聞いており、当該分野の研究者にとって必読の書となることは疑いない。

de la Vaissière, É. & E. Tromber (eds.) *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005
de la Vaissière, É., *Samarcande et Samarra : élites d'Asie centrale dans l'empire abbasside*, Paris, 2007
de la Vaissière, É. (ed.) *Islamisation de l'Asie centrale : processus locaux d'acculturation du VIIe au XIe siècle*, Paris, 2008
de la Vaissière, É., *Histoire des marchands Sogdiens*, 3ème édition, Paris, 2016（エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール（影山悦子 訳）『ソグド商人の歴史』岩波書店，2019年）

なお、以下の訳文中に見える【　】は、文意を整えるため、あるいは読者の理解を助けるための訳者による補足を示している。

最後に、本稿の翻訳を快諾し、雑誌（Journal Asiatique）編集部の許可も取得して下さった著者に心から感謝申し上げます。

本研究は、JSPS科研費（20K13198）の助成を受けたものである。

エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール著「玄奘の旅程に関する覚え書き」

玄奘の中央アジアの旅に関する出版物には、２つの相入れない編年が存在している。１つは、彼が627年に長安を出発しただろうというもので、もう１つは629年である。歴史の細部にすぎないであろうことが、テュルクとコーカサスの歴史、そしてインドの歴史に重要な影響を及ぼすのであり、玄奘の旅は、これらの地域における事件の年代を決定し、当事者たちの素性を明らかにするために重要である。[1] この議論は古くからあり、エドゥアール・シャヴァンヌが間接的に扱ったことがある。[2] 日本の歴史学界の大多数は、とりわけ桑山正進の考察をうけて627年を選び、[3] 西洋や中国の学界は629年とするが、どちらにも注目すべき例外はある。[4]

この議論は理屈に合わないもので、実のところ、古い資料は【ほとんど】全て、この求法僧の出発年を629年とするか、あるいは曖昧なままである。道宣の『広弘明集』だけが、同著者の他作品と食い違っていて一貫性がなく、627年としている。論理的に言えば、この議論は行われるべきではなく、孤立した627年という事例は単なる誤りとして説明できるし、他の全ての資料にある629年を修正するというのも受け入れ難い。後者の資料の中には玄奘の直接の協力者たちによって書かれた３つの伝記も含まれており、もし629年が、修正の結果によるもの、あるいは誤りであるのなら、この誤りが、１つではなく、３つの【伝記の】写本の伝承に沿ってどのように伝播したかを説明する必要があるだろう。

つまり、この議論が根を張っているのは、テキストや書体、あるいは写本の来歴の中ではなく、歴史学的考察の中である。この求法僧の弟子・慧立によって書かれた『慈恩伝』のテキストが伝える事実は629年に適合しない：すなわち、玄奘はスイアーブ近郊で西突厥の葉護可汗と面会しており、この名前で知られる人物は628年に死去しているので、玄奘は627年に出発したはずだ、と。

この推論の強みはその単純さにあり、これ以上それを練り上げようとする人はほとんどいなかった。627年は気候が非常に悪化していたことが指摘されており、玄奘もちょうど出発に際して雪が降っていたと伝えている。また、玄奘と可汗の面会の年代と、中国資料に従ってこの可汗が介入したと考えられているこの時期のペルシアの騒々しい政治状況とを関連づけようという試みがなされ、テュルクの中の政治的な出来事と関連して玄奘の旅程が変化したという分析がなされている。しかし、ひとつとして説得力がない。なぜなら、629年も気候は非常に寒冷であったし、[5] 一連の場当たり的な仮説に基づくペルシアとの関係は西側の資料によって効力を失ううえに、[6] 天山北方が政治的に困難な状況であったのはむしろ629年のほうであったからである。[7] シャヴァンヌは

方法論的にもっと首尾一貫しており、玄奘の旅の年代が優れた資料によって示されている一方、可汗が死去した年代は諸々の出来事から遠く隔たった資料が示しているにすぎないので、この【可汗が死去した】年代を誤りと仮定し、630年に繰り上げるのが良いだろうとした[8]。この630年という年代は、多くの東洋学者、とりわけテュルク学の著作で採用され続けたが[9]、そこまでラディカルになる必要は全くないだろう。可汗は確かに628年に死去したのである。

それよりも、最も強調しておかねばならないのは、627年の支持者たちは、どのように、誰によって、そしていつ、コーパス全体が629年に有利なように変更されたのかを全く説明していないということで、当然ながらそれを説明する責任は彼らにある。数多くのテキストと写本の読みによって証明されている情報を無効化したいと望むのであれば、それらのテキストの来歴を検討する必要がある。

直接関わる資料は次のものである。玄奘の伝記『大慈恩寺三蔵法師伝』は、部分的（とりわけ中央アジアに関する部分）に、玄奘存命中に彼の直接の協力者であった慧立によって執筆され、その後、688年頃に弟子の彦悰によって拡充されたのだが、彼は629年に出発したとしている（貞観三年秋八月）。この年代は3度言及されており、慧立が編纂したと想定されている部分にも、彦悰が編纂したと考えられている部分にもある：すなわち、テキスト冒頭の出立の部分、そして帰路に求法僧自身の手によってコータンから高昌に向けて発せられた手紙の中、そして最後はテクストの末尾である[10]。629という年代は、玄奘によって書かれた旅の記録『大唐西域記』のエピローグにもあり、ここは師匠の協力者であった弁機の手になる部分である[11]。この年代はまた、玄奘の協力者であり、彼の3年後、667年に死去した道宣によって編纂された、仏僧の伝記集『続高僧伝』[12]、および仏教経典目録『大唐内典録』にもある[13]。最後に、665年に『大唐故三蔵玄奘法師行状』と名付けられた冥祥による玄奘の伝記も、彼の出発を629年とする[14]。ただし、冥祥については何もわかっていない。

曖昧なテキストが2つあり、それらは「貞観初」と記しているが、強調しておかねばならないのは、「初」の意味をこれ以上明確にするのは不可能ということである。『旧唐書』玄奘伝は、貞観初めに出発し、17年間の不在の後、貞観十九年（645年）に帰国したとし（貞観初随商人往遊西域...在西域十七年...貞観十九年帰至京師）[15]、また道宣の『集古今仏道論衡』も彼の出発を貞観の初めとし、表現の曖昧さでは同じである[16]。

これら全ての資料に対して、唯一、彼が貞観元年、つまり627年に出発したとするものがある。それは同じく道宣の『広弘明集』で、師匠【の上表文】を引用した箇所で、出発を貞観元年とする（奘以貞観元年。往遊西域）[17]。このテキストは明らかな誤りを含んでおり、【大正蔵のテキストの】2行後で、貞観十八年に帰国したとしているが（以貞観十八年。方還京邑）、【他の】全ての資料はここを貞観十九年とする。このテキストに記されている年代は、簡単には説明できないことを認めなければならない。誤った到着年から、17年数えて出発年を換算し直したのだろうか？

もし629年という年代が間違いであったなら、この年代を与えている全作品のテキストの伝統においてこの年代は修正されていただろう。しかし、大蔵経の異なる版はテキストの読みのヴァリアントを全く伝えておらず[18]、これら全てのテキストは確かに貞観三年と記している。627年の支持者たちは皆、年代の表記に書体学的な混乱がある、すなわち、「一」あるいは「元」が「三」に置き換わり、貞観元年（一年）が三年に変えられたと仮定している。これは、編者自身の仕業か、あるいは後世の介入か、２つに１つである。ところが、３人の伝記著述家は玄奘と同時代の人であり、そのうち２人は彼と共に生活し、作業したのである[19]。彼らが、師の存命中に、その生涯で最も重要な西方への出発という出来事に関して誤った年代を記すことは不可能である。もし写本が後から修正されたのでなければ、629年はまさに玄奘が与えた年代である。

よって残るのは、編者とその直接の協力者たちがいなくなった後、依然として全ての作品を自由に利用できる謎の手によって修正した日付が与えられ、これら種々のテキストの写本全てに訂正が加えられた、という仮説である。敦煌やトルファン、そして日本の写本群のおかげで、我々はこれらの写本が修正され得た時期を絞り込む試みが可能である。トルファンで発見されたらしい玄奘伝のウイグル語訳の写本がある[20]。これは、10世紀に漢文写本から翻訳されたものである。ところが、これら【の漢文写本】が証明している伝承は、８世紀中頃以降に中国本土

で加えられたテキストへの変更を組み入れることはできなかったのだろう。翻訳は８世紀中頃に交通路が閉ざされる前に西方にもたらされたと思しき写本に基づいていて、敦煌写本には、648年の日付を持つ玄奘訳の経典があるが、[21] 反対に753年以降に中国本土からもたらされた、年代の明記された写本はない。[22] 残念ながら、敦煌とトルファンの資料群の中で唯一【年代の絞り込みを】試みられるのがこのウイグル語写本であり、他の写本は上述した作品の数節を含むものの、私が判断できる限りでは、我々が関心のある、つまり【玄奘の出発の】年代を示すその節を含んでいない。[23] いずれにしても、この特異な写本には2度、後者の年代、つまり629年が記されている。[24] なるほど、敦煌はトルファンではない、という反論があるだろうが、西からやってくるルートは同じである。あるいは、慧立の『慈恩伝』の写本が753年以降に西へ向かい、このウイグル語のテキストが依拠する漢文写本の伝承に影響を及ぼし得たかもしれない。しかしその場合、場当たり的な仮説が必要になる。つまり、曲がりなりにもありそうな仮説としては、629年という年代が8世紀中頃にはすでに『慈恩伝』のテキスト伝承に組み込まれていたというものである。この仮定的なテキスト修正が行われたかもしれないのは、師匠の生活や発言を直接目撃した人たちがいなくなった7世紀末から、８世紀中頃の間である。それには、それらのテキストが依然としてまとまって存在し、利用可能であり、それらに修正を加える正当な理由があったと仮定しなければならない。なぜなら、早い時期に【テキストの】散逸があり、その後に写本の一部分だけに修正が加えられたとしたら、おそらく【写本の】伝承の中にその痕跡やヴァリアントが残されるからである。テキストの修正を主導した者の手もその意図も全く不明のままであり、古い年代【627年】の支持者たちは、どうやって、なぜ、そして誰によって、年代が修正されたのかを全く説明していない。

この結果は部分的にしか満足のいくものではない。このウイグル語写本は、これまで一度も【この問題の】関連資料として付されたことがなかったのに、これをもとに1つの仮説しか立てることができない。しかし、日本にある写本のおかげで、【修正が行われたとされる】この不確実な期間をさらに短くすることができる。私は正倉院の写本の中に、玄奘の出発年を示す８世紀の写本があるかどうか確かめようとした。唯一の興味深い写本は『大唐内典録』で、問題の年代が記されている第５章が残されている。[25] しかし残念ながら、この写本はとても年代の新しいもので、テキストの歴史という観点から690年と750年の間に何が起こったのかを確かめるためには使用できず、[26] 敦煌のデータに何ら付け加えるところがない。

しかし、別の日本のコレクションがより興味深いことが明らかになった。647年の祖本にまで遡るとじゅうぶんに考えらえる写本伝承によって、【テキストに】修正があったという仮説が無効になるのである。京都の興聖寺が所蔵するかなり特別な『続高僧伝』の写本がそれであり、藤善真澄が再発見し、校訂した。[27] この写本自体は平安時代のものだが、【玄奘の出発に】629年という年代を与えている。これは、667年に道宣【の死】によって完成された現行版『続高僧伝』ではなく、それ以前の不完全な初稿であり、例えばその中では、650～660年代に活躍した僧侶・那提の伝記が欠けている。そこに含まれる玄奘の伝記は、647年12月、中国への帰国と最初の翻訳までである。この伝記は、不完全なだけでなく、テキストが現行版『続高僧伝』と様々な点で異なっている。いくつかのヴァリアントは単なる写し損じとみなせるが、他はそれでは説明できないほど重要なものである。[28] これらの異同は、興聖寺の写本が独立した伝承を辿ったものであり、現行版『続高僧伝』に至るそれとは調和していないことを示している。この写本が示す伝承は、玄奘の帰国直後の647年にまでさかのぼり、それは629年という【出発の】年代を示しているのである。

よって、テキストの歴史は明らかに629年を支持している。８世紀中頃にさかのぼるであろう『慈恩伝』の敦煌写本がこの年代を実証しているだけでなく、647年にさかのぼる別の系統を示す、『続高僧伝』の初版にあたる日本の写本もそれを証明しているのである。ここで、627年という年代にとって都合の良い歴史的根拠を検討してみよう。これを根拠に、一部の研究者は資料で読んだことを認めないのである。

玄奘が通過した時に統治していたテュルクの可汗は、いくつものテキストに言及されている。例えば、『西域記』の中で玄奘は、葉護可汗の子・肆葉護可汗が近頃バクトラ【バルフ】のナウバハールを略奪

しようとしたと記しており、このエピソードの後、彼は突然病で死去する。[29)]

他にも、慧立の『慈恩伝』では、セミレチエを通過した時のこととして、玄奘が突厥の葉護可汗と面会したと記されている。また、玄奘がトハーリスターンを統治する葉護可汗の長男【咀度設】にクンドゥズ近郊で会い、彼が息子（後の話では葉護可汗の孫と呼ばれている）の教唆によって殺されたことも書かれている。[30)] 後者の名前は明記されていない。

したがって、非常に単純な推論が展開される。すなわち、我々は別のところで肆の父親が統葉護可汗であることを知っているので、これらのテキストの中では後者が葉護可汗と呼ばれ、玄奘が面会したのは彼であると。つまり、3つの資料が統葉護可汗の死を628年としているので、玄奘は627年に出発したはずであると。

しかし、この推論は脆弱で、2つの異なるテキストが、固有名詞ではなく、単なる称号を用いて同じ人物を指していることを示唆する。しかし、それを証明するものは何もなく、中国資料の中では、肆葉護可汗も父の統と同じく葉護可汗である。もっとも、彼の名前は、肆葉護可汗ではなく、葉護可汗・肆と訳すのがより正確であるが。

この仮説に有利な、より説得力のある別の論拠があるのだが、不思議なことにこれまで一度も使用されたことがない。葉護可汗の孫が実父を倒したのだから、この孫は少なくとも20～25歳にはなっているはずで、それより早くに宮廷で革命を実行する人的手段があったとは考えにくい。もし、これが統ではなく肆の孫だとすると、628年に統が死んだとき、すでに20歳を超える曾孫がいたことになるが、とてもそうは考えられない。よって、『慈恩伝』のこの逸話では、葉護可汗は統を指していると思われ、もし慧立が一貫して執筆していたとすれば、遡って、セミレチエで面会したこの称号を持つ者も統を指していると考えることができる。しかし、もし慧立が正確でなく、例えば葉護可汗という呼称をありのまま、つまり単なる称号として使っていたとしたら、この分析は全て崩れ去ってしまうことに注意すべきである。

また、とりわけこの論拠は、玄奘自身が【『西域記』の中で】、バルフを通過した時、あるいはその直後、バルフの目前で葉護可汗・肆が死んだと記している事実を覆すことができない。この事実は、新しい方の年代（629年出発）とは完全に合致し、古い方の年代（627年出発）とは完全に矛盾する。[訳註1)] 我々は、葉護可汗・肆が玉座を追われ、631年か632年に南方に逃れたことを確かに知っている。[31)] もし玄奘が627年に出発したのなら、彼は628年にバルフを通過したことになり、629年に出発したのなら、630年春にセミレチエに滞在し、峠が開通しバーミヤーンへ向かう前の630年から631年にかけての冬をバルフで過ごしたことになる。彼はクンドゥズ付近、次いでバルフ、グーズガーン、そして再びバルフと訪問し、バクトリアに長期間滞在したので、630年にヒンドゥークシュを越えることは不可能である。よって彼は、この頃起こった葉護可汗・肆の死を631年の晩春に知った可能性がある。627年説の支持者たちは、この一節を【上手く】説明できないことを告白するか、完全に沈黙している。[32)]

これらの出来事への言及はないものの、『続高僧伝』は、バルフについて、「この国は近ごろ葉護の南側の拠点である（国近葉護南牙也）」と述べ、一連の出来事があったことを部分的に裏付けている。この一節の読みは、647年の【興聖寺】本でも同じである。[33)] 少し前にバルフで混乱があり、ある葉護可汗がそこに身を置いたとも考えられる。しかし、いかなる資料も統の南方への逃走には言及しておらず、これは明らかに肆の身の上に起こったことで、彼は少数の騎兵と共に康居に逃れ、突如として死去した（肆葉護以軽騎遁於康居、尋卒）。[34)] これが『西域記』で肆に起こったことであり、逆に統は暗殺されたのである。さらに、権力を手中にする以前の肆は葉護の称号を持っておらず、単にテギンであった。[35)] 『西域記』と同様に、『続高僧伝』は631年の出来事を描写しているのであり、全てが【627年出発という】早い年代付けの障害となっている。

したがって、おわかりのように、玄奘の出発を629年とするには、何らかの過失があったとして『広弘明集』のテキストを修正し、そして、これらのテュルクの話には極めて疎遠であった慧立が玄奘のセミレチエ訪問についての描写においては不正確であり、玄奘が肆葉護可汗について語ったのに、葉護可汗とだけ書き留めたことを受け入れるだけでよい。

もし627年（貞観元年）の出発とするのであれば、次のことを受け入れなければならない。

- 玄奘は『西域記』に記されたコータンから発し

た【太宗への】上表文において、【出発の年代を貞観元年ではなく三年と】間違えたか、あるいは【貞観元年から三年に】修正している。
- 玄奘の帰国から2年後、彼の協力者であった道宣は『続高僧伝』の初版で誤った年を記し、それが修正されなかった。
- 玄奘の協力者であった弁機は、『西域記』の跋文において、【出発の年代を貞観元年ではなく三年と】間違えているか、あるいは【貞観元年から三年に】修正している。
- 慧立【と彦悰】は『慈恩伝』において、三度にわたって【出発年を】間違えているか、あるいは修正している。
- 道宣は『大唐内典録』において、【出発年を】間違えているか、あるいは修正している。
- 冥詳は『大唐故三蔵玄奘法師行状』において、【出発年を】間違えているか、あるいは修正している。
- 諸資料が伝えていることとは異なり、統葉護がバルフに逗留し、そこで自然死した。
- 玄奘がバルフの前で肆葉護可汗の死について話しているのは間違いである。

慎重さという単純な原則に基づけば、２つの解決策の中から、諸資料に課される補正がより少ない方を選ぶことになる。優れたテキストの伝承が629年という年代を与えていること、そしてテキストに述べられているテルクの可汗たちの行動を説明できるのはこの年代だけという2つの事実を考慮に入れると、私はこの年代を採用すべきだと考える。

註

1）インドに関しては、例えば、Tansen Sen, *Buddhism Diplomacy, and Trade: the Realignment of Sino-Indian Relations 600-1400*, Uiniversity of Hawai'i Press, 2003, p. 250を見よ。テルク世界、コーカサスに関してはÉ. de la Vaissière, "Ziebel Qaghan Identified", in: C. Zuckerman (ed.) *Constructing the seventh century*, Paris, 2013, pp. 741-748を見よ【この論考は本稿発表時には未刊であったが、その後発表されたため、ここでは正確な書誌情報を記載している】。

2）É. Chavannes, *Documents sur les Tou-Kiue (Turcs) occidentaux*, Saint Pétersbourg, 1903, p. 194

3）桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』人物中国の歴史、東京：大蔵出版、1981年。英語による議論（Sh. Kuwayama, "How Xuanzang Learned about Nalanda", in: A. Forte (ed.) *Tang China and Beyond: Studies on East Asia from the Seventh to the Tenth Century*, Kyoto, 1988, pp. 1-33、および彼による『西域記』の翻訳（桑山正進『大唐西域記』大乗仏典 日本・中国編9、東京：中央公論社、1987年）も参照せよ。

4）例えば、この求法僧の伝記に関する西洋の主要な著作であるA. Mayer, *Xuanzangs Leben und Werk. Teil 1. Xuanzang. Übersetzer und Heilger*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1992は、桑山の編年に従っている。627年を支持する中国の学者たちの中では、例えばH. L. Lo, "A Study of the Chronology of Hsüan-chuang", *Journal of Oriental Studies*, III, 1856, pp. 34-47を見よ。また、楊廷福『玄奘年譜』、北京：中華書局、1988年、p. 89 ffも見よ。

5）Liu Mau-Tsai, *Die Chinesischen Nachrichten zur Geschichte des Ost-Türken (T'u-Küe)*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1958, p. 143。北半球全域の気候に影響を及ぼした火山活動により、627年～629年は非常に寒冷であった。漢文資料と雪氷学のデータが、Jie Fei, Jie Zhou & Yongjian Hou, "Circa A.D. 626 volcanic eruption, climatic cooling, and the collapse of the Eastern Turkic Empire", *Climatic Change* 81, 2007, pp. 469-475に集められている。

6）Kuwayama "How Xuanzang Learned ..." pp. 31-32は、ホスローの失墜においてテュルクが果たした役割をありそうもないほど過大評価している。サーサーン朝の衰退にいたる経緯はとても良く知られているし、テュルクがコーカサスで果たした役割も限られている。É. de la Vaissière "Ziebel Qaghan Identified" を見よ。いかなるテュルクのトドンもクテシフォンで権力を横奪したことはないし、カワードがイルテベルの地位に落ちたこともない！桑山は資料が中央アジアのテュルクについて語っていることを、ペルシアにまで敷衍している。

7）頡利【可汗】の甥である阿史那社爾は天山の北東、とりわけ、玄奘が通過しようとしたが高昌王【が彼を招聘したこと】によって避けて通ることになった可汗浮図城を奪取した。この征服活動は628年に起こったので、627年に出発したこの求法僧を妨げるには遅すぎる。

8）統【葉護】が死去した年代は『新唐書』217: 6134からわかる。Chavannes, *Documents* ..., p. 95を見よ。

9）例えば、A. Bombachi, "Qui était Jebu Xak'n ?", *Turcica* 2, 1970, pp. 22-23。

10）大正50, 2053: 222, 251, 278

11）大正50, 2087: 946

12）大正50, 2060: 447

13）大正55, 2149: 283

14）大正50, 2052: 214

15）『旧唐書』191: 5108

16）大正52, 2104: 387

17）大正52, 2103: 258

18）私はこれを調査するため、F. Deleanu, "The Transmission of Xuanzang's Translation of the *Yogācārabhūmi* in East Asia – With a Philological Analysis of Scroll XXXIII", in *Manuscripts Canon and a Basic Survey of Kongō-ji Sacred*

Texts, Japan Society for the Promotion of Science, 2007, pp. 7-13で示された方法論に従い、大正【新脩大蔵経】のヴァリアントと中華大蔵経（北京、1984-1996）のそれとを比較した。これらの版は、『広弘明集』の【出発】年代に関してもヴァリアントを伝えていない。

19）玄奘の交流関係や伝記著述家たちの関係についての詳細な説明は、A. Mayer, *Xuanzang Leben* ... p. 34以下を見よ。

20）K. Barat, *The Uygur-Turkic Biography of the Seventh-Century Chinese Buddhist Pilgrim Xuanzang. Ninth and Tenth Chapter*, Uralic and Altaic Series 166, Bloomington, 2000, p. iii以下。

21）この写本はPelliot 3709である。奥付の翻訳は、M. Soymié, *Catalogue des manuscrits chinois de Touen-houng, fonds Pelliot de la Bibliothèque nationale*, vol. 4, Paris, EFEO, 1991, p. 192にある。

22）J. P. Drège, “Papiers de Dunhuang. Essai d’analyse morphologique des manuscrits chinois datés”, *T’oung pao*, LXVII, 3-5, 1981, p. 346。ただし、四川からもたらされた【753年】以降のものは確認されている。

23）私は、大正蔵の電子版で、貞観元年、あるいは貞観三年と、玄奘、あるいは単に奘との組み合わせを横断検索し、出発年を含む大蔵経内の全てのテキストを同定し、次いで、『敦煌遺書総目索引新編』（北京：中華書局、2000年）を利用し、それらのテキストの敦煌文書内での存在を確認し、最後にどの断片が残っているかを写本の写真（主に『敦煌宝蔵』）で確認した。敦煌の仏教経典と漢文写本が入り乱れる場で私を導いてくれた、Jean-Pierre Drège氏、Sylvie Hureau氏、Françoise Wang-Toutain氏に対して、心より感謝申し上げます。

24）出発年は、サンクト・ペテルブルグに保管されている写本に見られる。校訂と翻訳は、 Л. Ю. Тугушева, *Уйгурская версия биографии Сюань-цзана*, Москва: Наука, 1991（断片V80の翻訳p. 218と校訂テキストp. 90）を見よ。この年代はK. Barat, The *Uygur-Turkic Biography* ..., p. 204で校訂された部分にも見える（この2番目のテキストでは、年代は干支で示されている）。

25）『日本現存八種一切経対照目録』東京、2006年を用い、何人もの同僚の力を借りて、私はこれを調べることができた。国際仏教学大学院大学の斉藤達也氏とFlorin Deleanu氏、そして、親切にもこれらの同僚と連絡を取ってくれたJean-Noël Robert氏に、心より感謝申し上げます。

26）760年以降の正倉院所蔵資料に、この写本が含まれていないことを確認して下さった吉田豊氏に心より感謝申し上げます。

27）藤善真澄『道宣伝の研究』、京都：京都大学学術出版会、2002年、pp. 179-244。道宣の生涯に関する著作を送って下さった藤善真澄先生、そして藤善先生と連絡を取り、全ての質問の仲介役になってくれたvon Verschuer氏に衷心より感謝申し上げます。

28）藤善『道宣伝の研究』pp. 202-244は、興聖寺写本のテキストを示し、現行版『続高僧伝』との多数の異同を注記している。

29）大正51, 2087: 872。この部分の描写は、脳卒中を示唆する。

30）大正50, 2053: 227, 228, 250

31）630年には彼の父を暗殺した者【統葉護の伯父・莫賀咄侯屈利俟毗可汗】がまだ存命だが、『冊府元亀』によると、632年にはすでに彼の後継者が登位している（É. Chavannes, *Documents* ... p. 55、および註３、４）。

32）桑山（訳）『大唐西域記』pp. 148-150

33）藤善『道宣伝の研究』p. 207

34）『旧唐書』巻194：5183

35）『旧唐書』巻194：5182

訳註

訳註１）以下、この段落での指摘は、玄奘が肆葉護可汗の死亡に関する情報を帰路に得たとすれば成り立たないものであり、桑山はこの立場を採っている。